

波頭を越えて

竹島レポート

第1部 ④

「あん人は、だいぶんアシカを持って帰りました。その川に泳がしておりましたなあ」

昭和初期に竹島でアシカ漁に従事した中本飲太郎の妻、クニ子(94)は、久見漁港(島根県隠岐の島町)近くの川に当時、アシカがたぐさんいたと話す。

「竹島漁業合資会社」の共同経営者の一人、橋岡忠重の聞き書きには、「昭和11年春秋2回出漁、20頭近くアシカを捕獲し相当の利益があった。木下サーカスには、14年まで秋とれる小さいアシカを

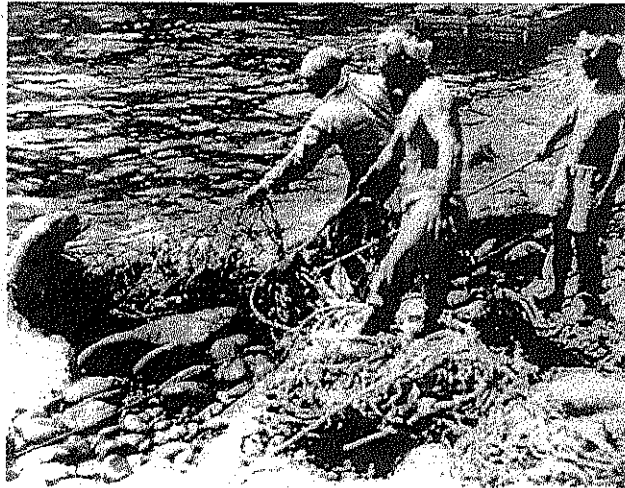
1匹200円にて売却した」とある。同社では当初、毎年1000頭前後捕獲したアシカの皮を皮革製品に、油脂をせつけんなどに加工販売していたが、橋岡は昭和8年から、生け捕りにしたアシカを年20、30頭、サーカスや動物園へ売るようになった。

大阪市立天王寺動物園には、園長が竹島でのアシカ漁に同行し、捕らえたニホンアシカを同園で飼育したという記録も残っている。主要な繁殖地だった竹島からは、京阪神の広い範囲に「竹島産」が流通していたのだ。

「竹島産」が流通していたのだ。

アシカの繁殖地

飼育しサーカスへ販売



昭和初期、竹島で行われたアシカ漁の様子。大きいものだと120貫(450kg)ぐらいあったという(隠岐郷土館提供)

◇ 飲太郎が竹島へ出漁したとき、クニ子は乳飲み子を含む4人の子育てに追われていた。

「危ない航海で、生きて帰れるかは分からん」と聞かされ、前後には水杯を交わした。出漁中は、毎日子供の手をひいて近くの神社にはたし参りをし、無事を祈った。船が無事に着いたかも分からなければ、いつ帰るといふ見通しも立たない。さぞ心配だったでしょう、と聞く。「(夫が)いない間の百姓仕事は大変でした」と、ぼつりとおやいた。

力自慢だった夫は、アシカ漁専門で活躍。帰るとまたカナギ漁(アワビ漁)や農作業に戻って働いた。

飲太郎が出漁していたころ、「親方」は税務署の目が

をいつてくるほどなついたりして、そりゃあかわいもんじゃった」

隠岐では戦後しばらくまで、川に泳ぐアシカが日常的に見られた。だが、竹島の繁殖は昭和47年まで確認されたものの、個体の最後の目撃例は50年。その後、生息情報は今も得られていない。

原因には、隠岐の人々による捕獲も挙げられているが、許可制だった漁は常に「保存計画」と並行して進められていた。だが戦後、竹島の実効支配を始めた韓国政府は保護政策をとらず、むしろ軍事要塞化により環境破壊が進んだ。「李承晩ライン」が引かれたければ、ニホンアシカたちは今も、竹島の洞窟で体を休めていたかもしれない。

「アシカは生後3カ月までは死亡率が高いが、半年を過ぎればほとんど人に慣れないうえ、茶も覚えなくなるから、3カ月から半年になるまでは、こつちで育ててから売っていた。小魚を与えると、後

をいつてくるほどなついたりして、そりゃあかわいもんじゃった」

(文中敬称略)